

# 現地理解教育への取り組み

前大連日本人学校 教諭

大阪市立花乃井中学校 教諭 中西 正 明

キーワード：現地理解，校外学習，中国語

## 1. はじめに

大連は中国遼寧省の地級市（地区クラスの市）である。経済的重要性から省クラスの自主権をもつ副省級市にも指定されている。中国東北部の中で最も南に位置し、南西に突き出た遼東半島にあって三方を海に囲まれている。緯度は日本の仙台ぐらいなので、冬はかなり寒いが海洋性気候のため降雪量は少ない。大連行政所轄部を含めた面積は12574km<sup>2</sup>、総人口は約589.4万人、市区人口280万人となっている。

大連日本人学校は平成6年4月に開校した。前身の補習授業校は平成2年からスタートしている。『中国民航』という航空会社が保有する保養施設『民航療養院』の一部を借用し、学校用に手を加えて校舎とし、運動場や体育館等の運動施設もこの療養院内のものを使用している。何よりも眼下に海が広がる大連でも有数の景勝地にあり、自然環境としては申し分ない。しかし、もともと学校として建てられたものではないので、教室や音楽室の音の響きが気になったり、理科室や家庭科室が手狭で水回りやガスの便が悪かったりと難点も多々あるが、校舎の壁面や内装工事・講堂の改築・教室床のフローリング工事・各教室へのエアコン設置・運動場の人工芝化等、これまで着々と整備が進められてきた。講堂には液晶プロジェクターやスクリーン等も完備。また、パソコン教室には30台のパソコンが設置されており、ホストコンピュータによる校内LAN（常時インターネット接続可）も導入されている。これらは各授業を中心として、特別活動等のあらゆる場面を通して活用されている。児童生徒数は幼稚園・小学部・中学部合わせて210名（平成19年）余で、在籍数の増減についてはここ2・3年横ばい傾向である。1クラス10～20前後の少人数編成で、特に中学部は毎年全学年で30名前後であるため、体育の授業をはじめ諸活動を全学年で行うことが多い。

ここでは私が担当した在任2年目（小学部5年）における校外学習の取り組みと、在任3年目の中国語学習の取り組みを紹介することとする。



【教室の窓から見える海】

## 2. 活動の実際

### (1) 校外学習

在外教育施設にあっては、子どもたちの安全確保という課題が最優先されるため、校外学習においては多くの制限が加えられる。特に病気やケガについては、その治療のために一時帰国を余儀なくされる可能性も充分にある。治安事情や交通事情はもちろんのこと、トイレの状況や食事場所の環境、関係場所付近の工事やイベントなどの情報を良く踏まえた上で、しっかりした下見を行うことと、緊急時に対応するための体制を厳重にチェックしておく必要がある。

大連日本人学校の場合、まず担当者が行う1次下見、そして学部主任を中心とする2次下見を行っている。また、日々状況が変わる可能性を考慮し、訪問先などへの打ち合わせは必要に応じて数回行われることもある。当日の教員の引率者は1クラス2名以上とし、警備員と通訳に必ず同行してもらうことになっている。

以上の枠の中で、十分に成果をあげることができる取り組みをできる限り実践した。小学部5年では年間3回の校外学習の機会が設けられている。そのそれぞれを現地理解はもとより、社会科や総合的な学習の時間として位置づけて取り組んだ。

#### ① フィールドワーク

フィールドワークにおいては、当日の悪天候によって予定の大幅な変更を余儀なくされたにもかかわらず、子どもたちの活動は、みずからコースを考えたり可能な活動を話し合ったり決めていたりするなど、主体的に取り組む姿勢が強く感じられた。

企画段階で子どもたちに興味を持たせるために留意した点は、「なるべく体験したことがないこと」に着目することである。そこで、安全確保に若干の不安はあったが、移動手段としては学校バスではなく公共の路線バス・路面電車を利用することにした。この学年の子どもたちは、昨年度に大連の交通機関について調べ学習を行っていて、知識としては多くのものをもっていたが、実際に乗ったことがあるという者は少なかった。また、乗ったことがあるという者にしてもその回数は数えるほどで、日本のように頻繁に利用している者は皆無であった。それは、普段の移動手段としてタクシーや自家用車を利用している在外の子どもたちの特徴でもある。したがって、事前学習の段階から交通機関に対する調べ学習は、ほとんどの者が楽しみながら行っていた。また、実際に乗ってみたときに、乗客の様子や車内の設備・停車駅やその周辺の風景など、自分たちの今まで調べてきたことを確かめる態度が顕著に見られた。

班編成については、まずコース別に希望者をとって、人数調整はくじ引きで行った。その結果、各班の構成は、仲良しグループ+ $a$ というメンバーとなった。それが良かったのか、調べ学習の手順や問題が起きたときの対処の仕方は話し合ったりスムーズに行われていた。また、+ $a$ のメンバーもうまく仲間にとけこみ、それぞれ分担した役割の責任を果たせていたように思われる。午後からは3つの都道府県事務所を各班で訪問したが、これでもできる限り出身県（あるいはその周辺の県）のメンバーがその事務所に訪問できるように配慮した。

#### ② 社会見学

2回目の校外学習であった大連電視台・大連電視塔への社会見学では、社会科の授業でやっている『わたしたちの生活と情報』などともリンクさせながら、実際のテレビ局の裏側を知ることやアナウンサーなどの体験をするということを、興味関心を引き出す要素として重視した。これまでいっしょに活動したことがない相手と組めるように配慮した。普段から子どもたちに興味の在るテレビに関する学習なので、事前の調べ学習についても自然と熱が入っていたことは、その質問内容に表れていた。テレビ局の仕事内容や、番組編成の手順、宣伝や営業の効果など、各自がそれぞれにいくつもの疑問を自ら抱いて質問する姿勢が顕著に見られた。事後のまとめ学習においても体験してきたことを手短かにまとめることができていた。また、事後の取り組みの1つとしてCM作りを行ったが、各グループでパソコンやビデオを利用するなどの工夫が見られ、力作も多かった。

#### ③ 職場見学・体験

3回目の校外学習は職場見学・体験であった。午前中の工場見学と午後からのホテルでの仕事体験は、子どもたちにとっては意外な発見と驚きが大きかったことが感想からうかがえる。ホテルでの体験学習は班編成を行って、各班でそれぞれのホテルを訪問したわけであるが、事前事後の学習の中では、調べたことや体験してきた内容についての意見交換が班を越えて自主的に行われた。校外学習のすべてに共通して上げられているねらいとして、現地理解ということと、日本とのつながりを理解するということがあるが、この3回目の学習がこのねらいを一番達成できたように思う。工場見学では多くの現地の人々が働く姿を目の当たりにすることができ、ホテルではスタッフとの懇談会などによって、日本と中国の違いについて分かりやすく聞くことができた。また、現地の人達の思いを実際に聞くことによって、日本では味わえない国際理解学習になった。

#### ④ 今後の課題

課題としては、取り組み日程の枠として、全体の間での発表の機会をあまりもてなかったことが上げられる。大連日本人学校では、年に1回、それまでの学習の取り組みを発表する『学習発表会』が全校行事として行っているが、時間の都合上ここでは1学年わずか20分程度の発表しかできない。事前の調べ学習と班活動を重視したあまり、事後においてそれぞれのまとめた内容を班のみんなで、他者に発表し、互いに批評し合う取り組みが充分ではなかった。今後は、ただ楽しかったという結末に終わらないように、そのような場を必ず設けて、その能力も育てていきたい。

また、在外教育施設特有の課題として、活動範囲が限定されやすいということがあげられる。(例えば、毎年・毎回同じようなところにしか行けないなど) これに関しては、我々教員が常に現地理解にアンテナをはりめぐらせ、ネットワークを広げていく中で、子どもたちがより主体的に活動できるような場所を開拓していく以外にない。

## (2) 中国語教育

### ① 中国語の授業

各学年(小学部1年生～中学部3年)毎週1校時(年間30時間)の授業を実施している。講師には現地大学の教員等(中国人)を迎え、各学級担任はアシスタントとして授業に参加し、児童・生徒の個別指導等に当たっている。学習のねらい等については以下のとおりである。

#### 《ねらい》

- \* 中国語を学びやすい環境にし、基本的な中国語日常会話を身につけるとともに、会話力を伸ばすための基礎作りをする。
- \* 中国語学習を通して、言語のみならず積極的に中国の文化や慣習に触れようとする態度を育て、国際理解の基礎を育む一助とする。

#### 《クラス編成と所属クラス》

小学部低学年(1・2・3年生)、小学部高学年(4・5・6年)、中学部の3つに分け、それぞれに下学年から初級、中級、上級クラスを設定する。クラス分けについては講師の先生方と中国語担当・学級担任で相談して行っていく。クラス編成については各学期の授業始めまでに行う。

#### 《学習の内容》

- \* 全学年共通<入門> ピンインの読み方、簡単な単語、あいさつ
- \* 小学部低学年(初級) 簡単な挨拶、ゲーム、歌、いろいろな単語  
(中級) ピンイン、いろいろな単語、挨拶、簡単な会話  
(上級) ピンイン、いろいろな単語、挨拶、会話、年間計画に基づく教科書の本文
- \* 小学部高学年(初級) ピンイン、いろいろな単語、挨拶、簡単な会話、年間計画に基づく教科書の本文  
(中級) 書き取りを含めた会話、単語、年間計画に基づく教科書の本文  
(上級) 書き取りを含めた会話、応用の要素を含む単語、年間計画に基づく教科書の本文
- \* 中学部(初級) ピンイン、書き取り、簡単な挨拶、簡単な会話、年間計画に基づく教科書の本文  
(中級) 日常会話、挨拶、年間計画に基づく教科書の本文  
(上級) 文章読み、日常会話、年間計画に基づく教科書の本文

各授業は、児童・生徒の実態に合わせて学習内容を柔軟に実施し、後述する『今週の中国語』の復習も授業の中に盛り込んでいった。中国語講師たちとの打ち合わせを充実させ、常に授業状況の掌握と情報の収集に心がけた。尚、教科書・教材については学校独自の物を作成し使用している。

### ② 『今週の中国語』コーナーの充実

『今週の中国語』と題して毎週火曜日の朝に行われている全校集会やふれあい集会後の時間(約10分間)を利

用して、全校で簡単な中国語会話を学習している。中国語担当の教職員が中心となって企画運営し、その日に学習した会話フレーズは、週を通じての会話課題として、休み時間などを利用して会話実践に取り組みさせている。学習のねらい等については以下のとおりである。

#### 《ねらい》

- \* 中国語に興味をもち、進んで話そうとする態度を養う。
- \* 会話練習を通して、簡単な会話ができるようにする。
- \* 言語の学習を通して、中国の文化を理解する。
- \* 教職員や校内の中国人スタッフと会話をすることで交流を深める。

#### 《学習内容と方法》

- \* 全校の児童・生徒及び教職員・スタッフが参加する。
- \* 毎週タイムリーなテーマや場面を設定し、プレゼンテーションソフトなどを使用して、小学部低学年にも分かりやすい内容にする。
- \* ゲームやクイズ等も取り入れ、楽しく親しみやすい学習にする。

実践にあたっては、特に校内で働く中国人スタッフとの会話・ふれあいが充分にできるように、毎回趣向をこらしてきた。単なる中国語の会話にとどまらず、中国文化にふれる内容や遊びながら学べる企画も盛り込んだ。舞台での寸劇や発表にはできるだけ多くの児童・生徒を登壇させるように心がけ、毎週の会話課題を実践したのものには特製シールを配付し、年間36回分全てのシールを集めた者には記念品も用意した。子どもたちが喜々としてシールを集めている姿を振り返ってみると、ねらいについては概ね達成できたものと思われる。



【『今週の中国語』の一場面】

### 3. おわりに

大連で3年間生活してみて感じたことは、まずは人々のものすごいパワー（いろんな意味で）と苦悩（これもいろんな意味で）だった。今や世界経済をリードするようになった中国。特にさまざまな問題を抱えながらも北京オリンピックを迎えた発展と変化は著しいものがあつた。様々な格差が広がる中で、無休で働いても低賃金のために厳しい生活を余儀なくされている人々の何と多いことか。しかし、それでも皆たくましく頑張っていた。

そして、各地に残る戦争の傷跡。大連・旅順（大虐殺も含めて）はもちろんのこと、大連開発区周辺の砲台跡や金州の古戦場跡、瀋陽の平頂山惨案遺址、九・一八事変博物館、ハルピンの第731部隊遺址、北京の人民抗日戦争記念館、南京の大虐殺遇難同胞記念館、広州の古戦場跡……。かつて日本軍が中国の人々にしてしまった絶対に許されないこと。傷ついて苦しんでいる人々の姿、そしてそこにたたずみ涙ぐむおじいさんやおばあさんの姿を目の当たりにした。それは日本の学校ではほとんど教えてくれなかった真実だった。しかし、そんなことがあつたにもかかわらず、大連の人々はみんな優しく私たちに接してくれた。『侵華日軍…』とは関しても『日本人が…』とはけして言わない歴史認識をみなもっていたことに驚いた。

私の恩師は、まだ日中の国交が回復されていない1960年代に日中友好を提唱した。その恩師が「中国には『水を飲む時は、その井戸を掘ってくれた人のことを忘れてはならない』という諺がある。今を生きる私たちのために、これまで苦勞してくれた人々への尊敬と感謝の気持ちをけっして忘れてはならないということだ。」と教えてくれた。私は、今こその言葉をかみしめている。これまでの多くの人々が艱難辛苦をのりこえながら築いてきた友好の橋を渡って、今の私の立場がある。そう思うと、これからも更に頑張って、この3年間の貴重な経験を今後の教育活動に何としても生かしていかなければならないと決意するものである。